慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『鶏鼠物語・ 下』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.50 (2009. 12) ,p.75- 78
JaLC DOI	10.14991/002.20091200-0075
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20091200-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『鶏鼠物語・下』翻刻

石川　透

凡例

本書は、架蔵の絵巻（元奈良絵本）『鶏鼠物語・下』である。本書の影印は、『広がる奈良絵本・絵巻』（三弥井書店、二〇〇八年一一月刊）に紹介した。解題等は、そちらを参照していただきたい。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」『　』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

鶏鼠物語・下

ねすみのかたにも、このよし、きくよりも、「我等のいちそく、ちくるいをたのまん」とて、うころもちのむくすけをもつて、国々へつかひをたつる。

いつれもみな、おとろきさはき、はせのほる。まつ、むさしの国に、くまかへ、しゝの津のかみ、うさきのゑちこ、ふるたのきのかみ、さてまた、くはんとうよりのほるへい、かのさん太良、おなしく、いたちの権太郎、やきうやまとのかみ、ゐのしゝむしやをさきとして、これもまた、さいこくよりのほるせいは、きつね川を渡る。また、東国せいは、うしの背（せ）、しゝかたにゝかゝり、（一オ）

［挿絵・第一図］（一ウ）（二オ）

かくて、ひつじのあゆみ、ひまもなく、ねすみのすみかにつきにける。

その中に、ゐのしゝむしや、ねすみのちくこにあひて、申けるは、「まことに、此城はあなしろにて、さすかに、かたき、水せめなとにせは、たゝ一時にくつるへきなり。いさや、みやこもひろけれは、いつくにも、むまのかけひきもじゆうなる所に、しやうくはくをかまへん」とて、ゐのくまとをりにちんをとる。そのありさまは、つたへきく、いこくまうこか風にけをふるひ、しゝさうのいきほひも、かくやとおもひしられたり。

さて、にはとりの（二ウ）うたのかみは、『ときをうつしてかなはし』と、はや、をしよする」よし、きくいたゝき、その中より、かしはけのゑもんのかみ、ひときはすくれて、出たちける。

はたには、やまはといろのひたゝれに、しろいとをとしのよろひをき、おなしけのとりかふとのおをしめ、せんそちうたいにつたはれる、こたかまるといふたちをはき、ちやはきはねほとのこわきさしを、めてのわきにさしはして、山鳥のおにてはいたるやをひ、しけとうのゆみもち、きじのほろゝをさつとかけ、ひはりけなるこまに、つはくらをか（三オ）せ、とひのり、しらさきのはた一なかれさせ、まつさきかけてみえにけり。

そのほかのともからも、おのひ〳〵、とり〳〵のよろひをき、おもてのひろきてうだてを、めんとりはにつきかつかせ、そのせい三せんよきにて、をしよせ、ときをとつとつくる。此ものともかありさまを、ものによく〳〵たとふれは、異国のくじやく、ほうわうも、をそれをのゝくほとのすかたなり。さても、ねんがうは、寛永十三年八月下旬の事也。

さて、ねすみのかたには、なりをしつめて、ことのありさまをきゝゐたる。その日のふくしやう（三ウ）くんは、しろねすみ、いくさふきやうは、ましをのしゆんゑいまる、さふらひ大しやうには、一もんのつちやのうくろもちとそ、さためける。

中にも、ふるたのきのかみは、うきむしやにて、やくらのうへにあかりゐて、人〳〵のするいくさのけちをそ、したりける。その日のしやうそくには、ふすべかはのはらまきに、おなしけの五まひかふとをき、しゝにほたんのはひたてし、くまのかはのもみたひはき、やくらのあゆみのいたを、とう〳〵とふみて、れいのはらつゝみをうちならし、「かゝれや、うたて（四オ）や、ひと〳〵」とて、はやしたてゝそゐたりける。

にはとりのかたより、大しやうなれは、かしはけのゑもんのかみ、すゝみ出て、大をんしやうをあけて、「たゝいま、こゝもとへ、よせきたるつはものを、いかなるものとかおもふらん、かたしけなくも、にんわう八十四代、とばのゐんには、八百代のこういん、くたかけのうたのかみ、こゑたかのちやくなんに、かしはけのゑもんのかみ、こめつむとは、それかしか事にてあり。しやうのうちへ、もの申さん」と、あかつきこゑをいたして、たからかによはゝりけれは、しやう（四ウ）のうちには、なりをしつめ、けみやう、しつみやうを、たしかにきゝゐたり（五オ）。

［挿絵・第二図］（五ウ）（六オ）

かやうに、両ちん、しんとうして、かんばのはせちがふるあしをとは、うちやうてんまてもこたへ、けんけきをうちあはするつはをとは、こんりんさいまても、ひゝくやらんと、おひたゝし。

さるほとに、かのかうむりは、れんだいのあたりに、せうえうしてゐたりしか、「これより、みむまにあたつて、ときのこゑの、すさましくきこふるは、いかさま、いつそや、うたとちくこのがこうろん、やますして、すてに、かせんにをよふとおほえたり」とて、れんたいのをとんて出、あしにまかせて、いそきけるか、むらさきのゝあたりにて（六ウ）、ふるいけのかはつの三郎に、ゆきあひたり。

「これは、いつくへ」といへは、くたんのあらましをかたり、「わほくさせんとおもふ」と申けれは、かはつも、大きにおとろき、「おほせのことく、いかにもして、ぶゐのき、しかるへし」とて、おほくのむしの、その中に、ほうてうの四郎殿とて

ありしか、「いまは、あきかせさむうして、おひのはたへにしみわたれは、あたゝかにならんまては、うき世のすまゐなりかたし」とて、ふる野のかたはらに、かんきよしてありしを、「せひとも」とて、かたらひ、「かなはぬまてあつかはん」とて（七オ）、やかて、むらさきのをうちたつて、ひらのゝみやうしんをふしおかみ、きたのゝやしろをゆんてになし、一いきもつかす、いそきけり（七ウ）。

［挿絵・第三図］（八オ）

おりしも、あきのなかはなれは、はぎのにしきのひたゝれに、おもひ〳〵に、さゝかにのいとけのよろひを、野辺の草、すりなかにさつくとき、こうろきつきけなといふむまに、くつはむしをかませ、はたをりむしをなひかせ、われも〳〵ととひきたる。

ほとなく、みやこにつきしかは、まには鳥のうたにあひて、ほうてう殿、かはつ殿と申されけるは、「さて〳〵、おもひもよらぬ御くはたて、もつとも、ことはりにてははんへれとも、みきにも、かふふり殿、おほせらるゝことく、天下あんをんのおりから、草木国土をたやかに、我等（八ウ）ことときのむしけらまても、露のいのちを、やす〳〵とつなく事、御世につれてのゆへならすや。しかるときは、かみをまなふ、しもなれは、御代のせいひつに、したかはせたまふへし。そのうへ、ふるきことはにも、『かんこ、苔ふかふして、とりおとろかす』とあるは、御身のうへにてさふらはすや。それのみならす、『よのしつまれは、とりもをとせぬ』と、うたにもよまれたり。かやうの事をみゝずして、わかまゝにおもひたち、むかでかなはぬいくさにも、ときのけち〳〵にした（か）へば、ふかくをとるもならひなり（九オ）。かゝるよしなきせうふことには、たゞ、むねのむしをおしさげ、かんにんするにしくはなし。おほしめしとゝまりたまへ」と、かはつとほうでう、とりつきてあり。さらなる事を、さしつくやうに、いけんしけれは、にはとりも、すこし、こゝろとけて、みえにける。

ねすみのかたにも、あまたのとりつきむしとも、あつまり、「あな、ふかくのちくごとのや。月日のをんを、ふかくかうむる身か、わつかのさんようの事につきて、身にちをあやしたまはんこそ、ふかくなれ」とて、さま〳〵に、けうくんしけれは、さすか、ちくこも、いふ（九ウ）へきことはなくして、はらをそいられける。

かはつもほうてうも、をの〳〵、「あつかひのかひありつる」と、みな、よろこひのまゆをそ、ひらきける（一〇オ）。

［挿絵・第四図］（一〇ウ）（一一オ）

ほうでうとの、申させたまひけるは、「古人のいひつたへられしことばにも、『せんを、すこしも、はや具せよ』とあれは、いさや、此つひてに、たかひの中をなをし、一こんをまいらせん」とありけれは、「此ぎ、もつとも、さもありぬべし。たれも、かくこそおもへ」とて、こゝかしこへ、はしりまはれとも、いくさみたれのあとなれは、酒といふ物なし。「おもひいたしたる事あり」とて、もろ〳〵のむしとも、まかきのもとに、たゝへをきたるきくすいのありけるを、くみとりて、あけはのてう（一一ウ）しに、つかせつゝ、しやくとりむしにそ、わたしける。

たかひに、しきたいありて、三こんのさけ、すくれは、たかひのあくしんをひるかへし、しゆんのさかつきを、きやくにまはし、まふつ、うたふつ、あそふほとに、すてに、せきやうも、日ぐらしになり行は、けいくはのともしひを、たかくたてゝ、夜もすから、まひあそふほとに、「うたとのゝのまれたるさかつきを、あまたのむしの中に、やまばちにさゝれけるは、ことはり」とそ、をの〳〵、申あひける。

はち、たふ〳〵とうけもち、しはらくひかへて、申はんへりけるは、「人（一二オ）おほしといへとも、それかしかなにおうして、さかつきをくたさるゝは、かたしけなし。われも、御なにめてゝ、申べし。うたのかみとあるならは、一さし」と、しよまうする。ざちうのともから、「けに〳〵、これは、いはれたり」とて、かんしける。

にはとり、きひて、「このころのとりまきれに、うたひといふ事は、おもひおるたよりなし。しかれ共、御しよまうあるを、とかく申せは、かへつて、はゝかりなり」とて、こはつくろひして、調子をうたひ、「ゑつてう、なんしにすをぐひ、こば、ほくふうにいはへたり。うたにやはらく、かみこゝろ」と（一二ウ）、うたいすましけれは、そのざにありしとも、みな〳〵、かんるいをもよほし、かんしける（一三オ）。

［挿絵・第五図］（一三ウ）（一四オ）

又、むしの中に、せみ丸と歌人有。かたはらに、うちそはむきてゐたりしか、思ひ出したるふせいして、こうろきの墨すりなかし、かくなん。

君か代のひさしかるへきためしにはとりけた物もすみよしの京と、ふる事をぼんあんしけるは、やさしうそ、みえにける。

かやうの事を見聞に、花に鳴鶯（なくうぐひす）、水にすめるかはつの歌よむとは、これ成へし。地をはしるけた物、そらをかけるつはさまても、ことはりをもつはらとし、おこらす、をのかみち〳〵を、たつる事、これ、ひとへに、かみをまなふしもとそ、みえにける（一四ウ）。

かくて、夜もあけゝれは、ゑんしのかねも、みゝにきこえ、とりも、はや、こゑ〳〵につけわたれは、秋の夜のなか物かたりと、おもひしかとも、さむれは、夢とそ、しられける（一五オ）。

［挿絵・第六図］（一五ウ）